論文

愛知県立大学における手話教育に関する学生意識調査報告:「語学として手話を学びたい」という期待に応える教育の提言

国際関係学科　亀井　伸孝

【本論の要点】
- 愛知県立大学には、手話を学びたいと思っている学生層が少なからず存在する。
- 手話を学ぶ上で、課外活動としてよりも、「語学科目として履修したい」という要望が強い。
- 学生の学習意欲に応え、初習者対象の語学科目「日本手話 I」を開講することを提言する。

1. はじめに: 調査の背景と目的

ろう者が用いる日本手話（以下、「手話」と略記）は、日本語とは異なる体系をそなえた言語であり、私たちの社会のなかに共存する少数言語である。

一般に、手話は「文法を欠いたジェスチャーの集合」「日本語を手で表現したもの」などとの誤解が流布していたが、言語学的な研究などを経て、今日では日本語とは異なる特徴をもち、ろう者たちの間で世代間伝承される自然言語であることが明らかにされてきた（注 1）。それとともに、手話への理解とスキル向上をねらいとして、大学で言語学的な知見をふまえた語学講義としてこの言語を教授する事例が全国的に増えつつある。

先駆的な取り組みとして、四国学院大学や関西学院大学、立教大学などがあるが、それに続き、2012 年度には東京大学においても語学科目のひとつとして「日本手話」が開講された（伊藤, 2012）。これらの大学においては、日本手話がフランス語やドイツ語などと並ぶ選択語学のひとつとしての地位を得るに至っており、卒業に必要な第二言語のひとつとして位置づけられている例もある（注 2）。アメリカなど、手話の言語学的研究が進展し、大学教育の現場にも浸透している国と比べればその認知度はまだ低いとは言え（平, 2011）、日本においてもこれら先駆的な試みに注目が集まりつつある。

一般に、この言語の習得や普及が期待されており、かつ大学の貢献も期待されているが、本学の教育においては十分な位置づけや取り組みがなされていない。本学における今後の教育のあり方を検討する上で、学生の関心の動向を知ることを目的とし、本調査を行った。

2. 調査方法と回答の概要

2-1. 調査方法と対象

【調査日】2013 年 1 月 28 日

【調査対象】愛知県立大学学部生 262 人（学部別内訳: 外国語 187 人、教育福祉 35 人、情報 14 人、日本文化 26 人）

2013 年度後期授業「コミュニティにおけるコミュニケーション」（亀井）履修者のうち 2013 年 1 月 28 日（月）の出席者全員を対象として、質問紙による調査を行った（資料 1）。

本講義では、コミュニケーション論の一環として、岩波書店『手話の世界を訪ねよう』（亀井, 2009）をテキストとして授業を行うほか、2012 年 12 月に行われた 2 回のろう者の外部講師による講演に、授業の一環として参加した。一部の学生を除き、手話を自ら学んだ経験をもつ学生はほぼいない。ただし、本講義のなかで、言語として手話が用いられている場面を直接見るという経験をした学生たちである。

この調査には、「手話に関する知識を得た後の学生たちを対象としている」というバイアスがある。ただし、「手話は日本語とは異なる言語である」という基礎的な知識を欠いたまま、漠然としたイメージで関心のみについて調査を行っても、あまり意味がないであろう。手話が大学の語学科目で教授されうる固有の言語であるという認識をふまえた上で、本学においてその可能性があった場合の関心の度合いを尋ねることに積極的な意味があると考え、調査においてこの対象層を選択することとした（注 3）。

また、一般教養科目であることから、1-2 年生の回答が多いこと、長久手キャンパスで行われた授業であることに関連し、看護学部生を調査対象とすることができなかった点を付記しておく。

2-2. 回答の概要

【有効回答】 217 人
【無回答】 45 人
【有効回答率】 83%

有効回答の内訳

【学部別】 外国語: 113 人、教育福祉: 18 人、情報: 6 人、日本文化: 17 人、記入なし: 63 人
【性別】 男性: 30 人、女性: 144 人、記入なし: 43 人
【入学年別】 2012 年: 77 人、2011 年: 65 人、2010 年: 18 人、2009 年: 7 人、記入なし: 50 人

3. 結果

3-1. 全般的な傾向

五つの質問を設定した。それぞれに対する関心の度合いを、5 段階（非常に関心がある／やや関心がある／どちらとも言えない／あまり関心がない／まったく関心がない）から一つを選んでもらうという形で回答を得た。217 人の有効回答をまとめて集計したのが、表 1、表 2 および図 1 である。

表 1　手話に対する関心の度合いに関する五つの質問

Q1. あなたは、手話を学ぶことに関心がありますか。
Q2. あなたは、もし大学で手話に触れることができる単発の課外行事（たとえば 1 日のみ開催されるワークショップなど）が行われた場合、参加することに関心がありますか。
Q3. あなたは、もし大学が語学科目のひとつとして、初習者対象の講義（「日本手話 I」）を開講した場合、履修することに関心がありますか。
Q4. あなたは、もし大学が語学科目のひとつとして、既習者対象の講義（「日本手話 II」「日本手話 III」）を開講した場合、履修することに関心がありますか。
Q5. あなたは、もし大学が手話の専門家を育成する学科・専攻・コースを設置した場合、それを選択することに関心がありますか。

図 1　各質問に対する回答の割合（回答数: 217 人）

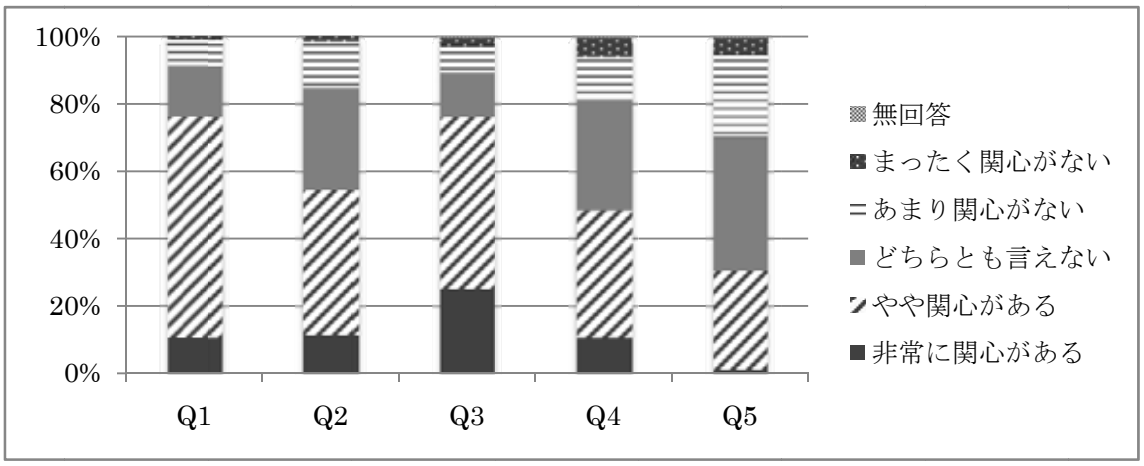


表 2　各質問に対する回答の実数（単位: 人）

	Q1	Q2	Q3	Q4	Q5
非常に関心がある	23	25	55	23	3
やや関心がある	142	93	110	82	63
どちらとも言えない	33	66	29	71	87
あまり関心がない	17	30	17	28	52
まったく関心がない	2	3	5	12	11
無回答	0	0	1	1	1
計	217	217	217	217	217

これらの結果から読み取れる特徴を、3 点挙げる。

1) 「手話を学びたい」という学生が非常に多い。

Q1（手話を学ぶことへの関心）、Q3（初習者対象の講義履修への関心）では、「非常に関心がある」「やや関心がある」を合わせるとほぼ 8 割近くの学生が手話を学ぶことに対して関心を示していた。今回の講義は、手話の言語学的特徴や、ろう者たちの文化に関する概論的な内容であり、手話の語学スキルに関する授業は含まれていなかったが、自ら手話の語学スキルを身に付けたいと願う学生が多いことが明らかになった。

2) 課外行事としてよりも、「講義としての開講」を望む傾向がある。

Q2（課外行事への関心）と Q3（初習者対象の講義履修への関心）を比べると、「非常に関心がある」「やや関心がある」を合わせればいずれも 6〜8 割の学生による関心の表明があり、興味の強さを物語っている。ただし、課外行事よりも「授業として履修する」方に関心を示す学生数がより多かった。

なお、Q3（初習者対象の講義履修への関心）における「非常に関心がある」の回答者実数は、55 人であった。語学科目として開講した場合、優に 2 クラス分の人数を確保できる規模である。

3) 高度に専門的な手話の教育に対しても、関心をもつ学生層が存在する。

Q4（既習者対象の講義履修への関心）、Q5（手話の専門家育成コースへの関心）といった、きわめて高度な手話の専門性を目指す内容に対しては、Q3（初習者対象の講義）に比べれば、関心をもつ人の割合はやや低い結果となっている。しかし、3〜5 割の学生が、これらに対しても関心を寄せていることが明らかになった。すでに何らかの学科・専攻に属し、あるていどの専門性をもって大学に通っているであろう学生たちにおいて、このような積極性が見られたことは、語学としての手話のスキルアップに強い魅力を感じる層が確かに存在することを物語っている。

3-2. 学部別の傾向

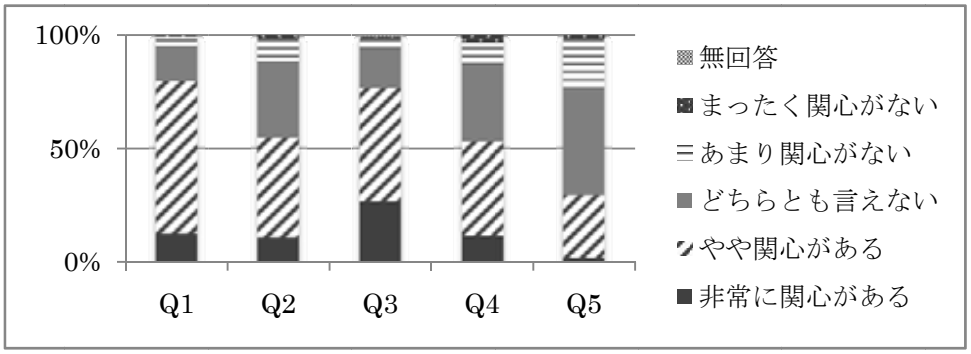
有効回答数 217 人のうち、所属学部を回答した 154 人について、学部別に関心の傾向を見た。結果は、図 2 に示した通りである。

全体としての傾向と大きくは変わらないが、次の各点を指摘することができるであろう。

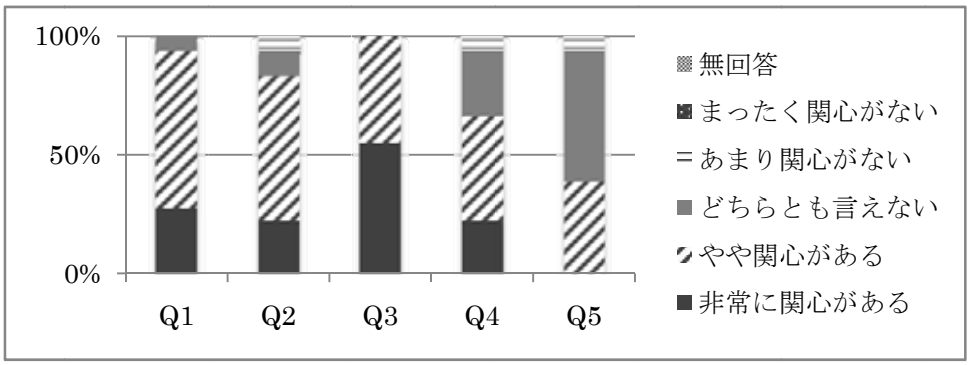
1) 教育福祉学部生の関心は、他学部生と比べてきわめて高い。
2) 外国語学部と日本文化学部の傾向は似通っており、Q1（手話を学ぶことへの関心）、Q3（初習者対象の講義履修への関心）に高い数値が出ている。
3) （回答数が少なすぎる面はあるものの、）情報科学部生の関心は低めである。
4) 文系 3 学部（外国語、教育福祉、日本文化）に共通して、「非常に関心がある」の回答率がもっとも高かったのが、Q3（初習者対象の講義履修への関心）であった。
5) 文系 3 学部に共通して、Q4（既習者対象の講義履修への関心）においても、「非常に関心がある」「やや関心がある」を合わせると、関心層は 5 割を超えている。

図 2　各質問に対する回答の割合（学部別）

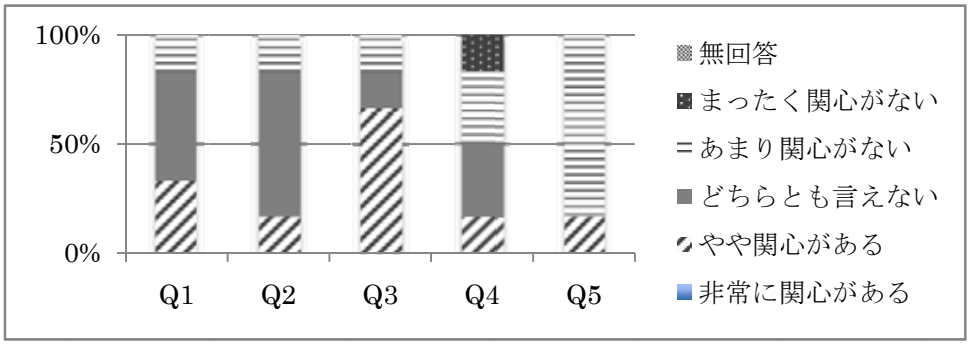
外国語学部（113 人）



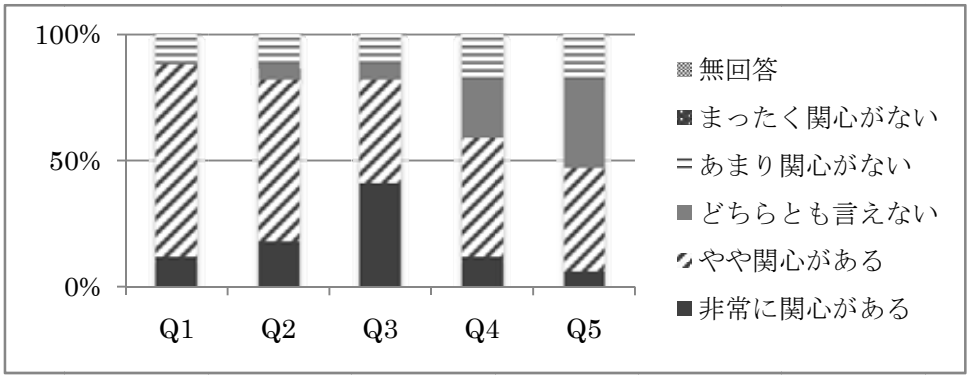
教育福祉学部（18 人）



情報科学部（6 人）



日本文化学部（17 人）



学部別の傾向をまとめると、強い関心層（おもに教育福祉学部）、中程度の関心層（おもに外国語学部、日本文化学部）、低めの関心層（おもに情報科学部）が見られること、「手話を学ぶこと」「それを初習者対象の講義として履修すること」に対して、とくに文系 3 学部における潜在的な要望が少なからず存在していることが分かった。

3-3. 自由記述欄の傾向

回答者の関心の有無にかかわらず、「手話に関する大学の取り組みについて、提言や要望があれば、自由に記してください。」という欄を設けて自由記述を集めた。回答数は 27 件であった（資料 2）。

記述内容に従い、27 件を三つのカテゴリーに分けた。

- カテゴリー1: 語学講義への期待（15 件）
- カテゴリー2: 講演や交流行事への期待（7 件）
- カテゴリー3: その他、大学や社会への一般的提言、抱負など（5 件）

これらから、以下のような特徴を指摘できる。

1) 27 件のうち、語学講義への期待を示したコメントは 15 件と、もっとも多かった。「私のように学びたくても 2 年後にはいないので学べない人を出さないように」と、早期の実現を望む意見もあった。
2) 語学講義に関連して、「自分の専攻言語圏で用いられている手話も学べたら嬉しい」「学校で手話検定が受けられたりすると良い」と、外国語教育に力を入れている本学らしいアイディアも見られた。
3) 語学講義のみならず、講演や交流など、手話に関連する幅広い取り組みへの期待があった。
4) 「できればもっと少人数で、和気あいあいと話したい」「ろう者の方とコミュニケーションをとれる場（機会）があればいいな」と、身近な異文化としての交流に期待するコメントもあった。
5) その他の提言などで、「面接でも手話ができる面接官が欲しいのではないか」と、本学の入試のあり方に対するコメントも見られた。

自由記述欄の結果からも、語学として手話講義を開講することへの待望論は、明らかに見て取ることができた。それ以外に、身近な交流を期待する声もあることが分かった。

4. 考察と提言

4-1. 考察

本学の学部生における手話教育への関心の動向として、以下の点が明らかとなった。

まず、全般的に、手話学習に対する関心が高いことである。本調査は、講義の中で、言語として、さらに関連する文化の側面も含めて、手話に関する基礎知識を得た後の学生たちを対象としている。手話に対する漠然としたあこがれといった感情ではなく、言語としての特性をふまえた上で、語学として学びたいという意欲を、多くの学生たちに見ることができた。

次に、語学科目としての手話講義の開講の待望論が強いことである。課外活動で学ぶ方法

もあるが、新しい言語の学習に挑戦する以上は、履修登録をして専門性をそなえた講師から学び、単位としての認定を受けるという学び方を望む学生が多いことを示しているであろう。

また、とくに文系 3 学部においては、中級以上のスキルアップにおいても、半数以上の学生たちが関心を示している結果が出た。大学側の取り組み方によっては、中級や上級も含めた、高度な手話の言語能力を身につけることを目指す学生層が現れる可能性を示している。

もし大学が手話の語学科目を設置した場合、1) 多くの学生たちの学習意欲に、履修と単位認定という形式をもって応えることができるであろうし、さらに、2) 手話の講義に受講者が集まらないという事態はほぼ想定できないであろう。この 2 点を、これらの結果は示している。

4-2. 提言

学生たちにおける関心動向調査の結果をふまえ、以下の提言を行いたい。

1) 初習者対象の語学科目「日本手話 I」を開講する。

ろう者による講義や交流への期待も強いことから、講師は手話を日常的に用いているろう者が担当することが望ましい。また、教育福祉学部におけるニーズが強い傾向は見られたものの、手話に対する関心の強さは学部の違いを越えて広く見られたため、学部内の専門科目としてよりも、教養課程で選択できる語学としての開講が望ましい。

看護学部に関しては、今回の調査対象とはならなかったが、おそらく関心層は一定存在することが推定されるため、看護学部生も受講の選択肢とすることができるように計画するとよい。

2) 中長期的な視点で、既習者対象の科目の開講を計画する。

「日本手話 I」の状況を見ながら、「日本手話 II」「III」の開講もあわせて検討することが望ましい。

3) 手話話者と共存する社会を念頭に置いた幅広い取り組みを行う。

入試時の対応のほか、耳が聞こえない学生が入学することを想定した態勢整備、在学生への啓発、職員の雇用など、耳が聞こえる人と聞こえない人が共存する大学を目指す取り組みをすることが望ましい。

4-3. おわりに

2013 年度、本学では教養教育の改革をめぐる議論が行われた。筆者が本調査結果をもとに、語学としての日本手話教育の意義を学内各所で説明したところ、少なからぬ教員がこの提案に関心をもっている実態が明らかになった。直近の実現は制度的に難しいという面はあるものの、近い将来の実現に向けた手応えを感じている。

学生たちの課外活動の手話学習の場としては、社会福祉学科と国際関係学科の学

写真 1
愛知県立大学手話の会（2013 年 5 月発足）
(2013 年 7 月、本学キャンパスにて筆者撮影)

生たちが中心となって、2013 年 5 月に「愛知県立大学手話の会」が発足した（2013 年 11 月現在、メンバー15 名）（写真1）。同会は、高等言語教育研究所の学生自主学習支援を利用して、毎週の手話の勉強会を続けている。

また、多文化共生研究所では、2012 年度から 2013 年度にかけて、合計 4 回の手話に関する公開行事を行っている。

このように、本学の課外で盛んになりつつある手話に関する取り組みを、正課の中に取り入れていくことを展望したい。手話という日本の少数言語を正課の一環として学ぶ機会を本学に設けることは、学生たちのニーズに応えるのみならず、言語的少数者に対する理解を深め、広く人権感覚に富んだ人材を育成することに寄与することであろう。学生たちの意欲に対して大学が応えるための教学上の課題として準備を進めることを期待する。

謝辞

本学における手話関係の取り組みについては、以下のみなさまのご協力をいただきました。記してお礼申し上げます。

- 2012 年度後期授業「コミュニティにおけるコミュニケーション」（亀井）履修者の学生のみなさん（調査における回答協力）
- 愛知県立大学手話の会（代表・岡島麻鈴［社会福祉学科］）のメンバーのみなさん
- 愛知県立大学高等言語教育研究所・第 14 回言語教育研究会（2013 年 8 月 8 日、愛知県長久手市、愛知県立大学にて開催）参加各位
- 愛知県立大学多文化共生研究所、前所長・稲村哲也名誉教授、ゲストのろう者講師各位

注

（注 1）これら手話の基本的な理解に関わることがらは、すでに啓発的なジュニア向けの新書で紹介した（亀井, 2009）。

（注 2）近年のこのような動向を受けて、日本手話学会は雑誌『手話学研究』で「大学における手話教育」を特集している（日本手話学会編, 2011）。

（注 3）語学として開講された場合、手話に関する知識をさほどもたない学生たちも履修を検討するであろう。ただし、「日本手話」が語学科目群のなかに位置づけられ、入学ガイダンスなどで語学選択のための説明が行われ、シラバスに言語として教授することが明記されていれば、「語学として学ぶ」という前提で学生が履修を検討するものと想定される。予備知識をあるていどもつ学生を対象とした今回の調査は、その状況に類似していると見なしうるであろう。

文献

伊藤たかね. 2012.「日本手話開講によせて」『教養学部報』(東京大学教養学部) 550 (2012 年 10 月 10 日): 3.

亀井伸孝. 2009.『手話の世界を訪ねよう』東京: 岩波書店.

平英司. 2011.「『特集; 大学における手話教育』に際して」『手話学研究』(日本手話学会) 20 (特集: 大学における手話教育): 3-4.

日本手話学会編. 2011.『手話学研究』(日本手話学会) 20 (特集: 大学における手話教育).

【資料 1】調査に用いた質問紙（2013 年 1 月 28 日実施）

「大学における手話教育」に関する意識調査（任意、無記名）

日本手話（以下、「手話」と略記）は日本語とは異なる体系をそなえた言語であり、私たちの社会のなかに共存する少数言語です。一般に、この言語の習得や普及が期待されていますが、本学の教育においては十分な位置づけや取り組みがなされていません。本学における今後の教育のあり方を検討する上で、学生の関心の動向を知ることを目的とし、この調査を行います。

回答するかどうかは、自由です。参加／不参加、回答の内容によって個人に不利益がもたらされることはありません。学生番号や氏名など、回答者が特定される情報を記す必要はありません。

□以下の回答欄のうち、ひとつを○で囲んで回答ください。

■あなたは、手話を学ぶことに関心がありますか。
【非常に関心がある　やや関心がある　どちらとも言えない　あまり関心がない　まったく関心がない】

■あなたは、もし大学で手話に触れることができる単発の課外行事（たとえば 1 日のみ開催されるワークショップなど）が行われた場合、参加することに関心がありますか。
【非常に関心がある　やや関心がある　どちらとも言えない　あまり関心がない　まったく関心がない】

■あなたは、もし大学が語学科目のひとつとして、初習者対象の講義（「日本手話 I」）を開講した場合、履修することに関心がありますか。
【非常に関心がある　やや関心がある　どちらとも言えない　あまり関心がない　まったく関心がない】

■あなたは、もし大学が語学科目のひとつとして、既習者対象の講義（「日本手話 II」「日本手話 III」）を開講した場合、履修することに関心がありますか。
【非常に関心がある　やや関心がある　どちらとも言えない　あまり関心がない　まったく関心がない】

■あなたは、もし大学が手話の専門家を育成する学科・専攻・コースを設置した場合、それを選択することに関心がありますか。
【非常に関心がある　やや関心がある　どちらとも言えない　あまり関心がない　まったく関心がない】

■手話に関する大学の取り組みについて、提言や要望があれば、自由に記してください。

■さしつかえなければ、以下の質問項目に回答してください。

学部［　　］　性別［男　女］　入学年［20_____年］

ありがとうございました。なお、結果は大学教育の今後を検討する上で公表されることがありえますので、あらかじめご了承ください。

調査年月日: 2013 年 1 月 28 日　調査実施者: 亀井伸孝（愛知県立大学）

【資料 2】自由記述欄の結果（27 件）

内容により、大まかに三つのカテゴリーに分類した。

（　）内は、回答者の学部、性別、入学年。

【カテゴリー1】語学講義への期待（15 件）
・ ぜひ開講してください。（外国語、女、2009） ・ 言語を重視している大学なので手話を取り入れるべきです。手話＝言語として講義を行ってほしい。亀井先生の行ってくれたろう者の方の講演は大学全般でやるべきことだと思います。（外国語、女、2011） ・ あまり大学で手話について、聞くことはあっても体験することはないので、そういう機会がふえるといい。（外国語、女、2011） ・ 日本手話だけでなく、自分の専攻言語圏で用いられている手話も学べたら嬉しいです。（外国語、女、2010） ・ 授業のカリキュラムのうち、1 つの授業として取り入れるのはよい。（外国語、女、2011） ・ 手話を勉強できる講義があったら、ぜひそれを受講したいと思います。学校で手話検定が受けられたりすると良いと思います。（外国語、女、2012） ・ 手話を学ぶ授業や講義をしていただきたいです。（外国語、女、2012） ・ 手話の授業をもうけてもいいと思う。（外国語、女、2012） ・ 手話に関する授業、とても良いと思います！（外国語、男、2012） ・ 手話を扱える方の話を聞くだけでなく、手話を学ぶことで、よりろう者の人々の言語や文化を学べ、感じれると思う。そうゆう授業もあっていいと思う。（外国語、男、2012） ・ 手話に関する講義をもっと増やしてもらうと継続して手話のことを知れると思う（教育福祉、女、2010） ・ 講義を作ってほしい。講座でも。サークルもあったら入る。（教育福祉、女、2011） ・ 手話の授業を開いてほしい。来年度が 4 年で最後なのですぐに…は難しいかも分かりませんが、私のように学びたくても 2 年後にはいないので学べない人を出さないように…！！（日本文化、女、2010） ・ 上記のような企画・講義がもっとあっていいと思う（日本文化、女、2011） ・ 手話の授業に興味があります。開講されたらぜひ受講したいです。（属性無回答）

【カテゴリー2】講演や交流行事への期待（7 件）
・ 今年度以上に手話に関する講演を聞きたいです。できればもっと少人数で、和気あいあいと話したいです。（外国語、女、2009） ・ ろう者の方とコミュニケーションをとれる場（機会）があればいいなと思います。（外国語、女、2011） ・ 今回手話について知る機会ができ、手話のことについて何も知らないということに気がついた。何故小学校等で勉強の機会がないのかと不思議に思う。せっかく興味を持てたのなら、前の大震災の講演のようなものに参加したい。（外国語、女、2012） ・ 今回の授業のような手話の軽いイントロデュースなら面白いと思うが、手話をより深く学び使えるようになろうとは思えません。（外国語、男、2012） ・ 積極的に手話の講演を開催してほしい（教育福祉、女、2011） ・ 講演会がすごく楽しかったので、またやってほしいです。（日本文化、女、2011） ・ 今回の講義のような、手話について知る機会を増やせば良いと思う。この講義は非常に面白かったです。（属性無回答）
【カテゴリー3】その他、大学や社会への一般的提言、抱負など（5 件）
・ 就活で手話が話せると言えたら強みになると思います。（外国語、女、2009） ・ まず大学の取り組みがあるのかどうかも知らない。出来ればもっと公にすべきでは。（外国語、男、2012） ・ 恐らく入学するのに面接などが困難だと思われるので、面接でも手話ができる面接官が欲しいのではないかと思いました。（情報、男、2010） ・ 大学に入ってはじめて触れた手話で、とてもよい経験になった。本気でかんたんな手話からでも始めてみようと思う。どんどん活動してほしい（属性無回答） ・ 大事なニュースは、手話通訳者も写した方がよい（属性無回答）